第八十一回六甲会（令和七年六月六日）　稲畑廣太郎選

兼題「万緑・夏の蝶」その他当季雑詠

第一句会入選句

不時着となる万緑の森の中　西脇英恵
夏蝶の雨の隙間を乱れ飛ぶ　一坪信舟
万緑の底の底より声かすか　松村咲子
ふと消ゆる風の織目に夏の蝶　足立朱麻
万緑の吸ひ込んでゆく千木の金　鈴木千恵
ささやきを聴いてゐるかに夏の蝶　松村咲子
○万緑の底に青澄む水の詩　福島良枝
シャンパンの弾ける音や夏の蝶　武本満子
○夏蝶と気付きし影の遠ざかる　福島良枝
耳元を掠めし羽音夏の蝶　中嶋陽太
万緑に蘇りたる芦屋川　金田八江子
虚子館へ道づれ楽し夏の蝶　平尾孝子
万緑や見上ぐる吾を包みくれ　北上美佐子
万緑や青き地球の息遣ひ　金田八江子
万緑の生気あまねく被災地に　金田八江子
万緑の林の中に染まりゆく　中村澄子
万緑に腹見せ眠る京の猫　船山美貴
海に向く墓標に立てば揚羽蝶　河辺さち子
○夏蝶や神しか出来ぬ翅の色　吉川博子
夏蝶のキス待つ花の香りかな　池本準一
万緑が囲む芭蕉の山河かな　前出美千子
万緑を抜けて御伽の図書館へ　西脇英恵
しまなみの万緑の島ひしめきて　黒田千賀子
翅休め吹かれて消ゆる夏の蝶　鎌野光子
尺蠖の枝になりきり昼休　北上美佐子
流行の先端を行く夏の蝶　山田佳音
夏蝶に逢ふたび開くこころの戸　三好ようこ
ビル風に逆らってゐる夏の蝶　中嶋陽太
夏蝶のひらりはらりと魔女めきぬ　前出公子
万緑や風を孕んでもののけに　船山美貴
水攻めの野に化身とも夏の蝶　田口ひさえ
万緑と万緑の間の水平線　奥野千草
夜半の鐘聞く万緑の眠りつつ　足立朱麻
曳く影の風より速し夏の蝶　福島良枝
万緑のかざす矜持や鹿の角　一坪信舟
万緑のゆらげば空もゆらぎけり　鈴木千恵
万緑や師邸の錠の新しく　奥野千草
淡き空突く万緑の吉備の峰　田口ひさえ
万緑に染まるベンチや握り飯　河辺さち子
万緑の大きな影が落ちてをり　奥野千草
万緑の中自転車で万緑へ　船山美貴
○万緑に金の眼で応ふ猫　山之口倫子
言霊のやうに舞ひ来る夏の蝶　河辺さち子
○万緑を奏づる野外音楽堂　山之口倫子
万緑の青百彩に迷ふ苑　徳岡美祢子
夕さりの闇へ消えたる夏の蝶　横山脩子
夏蝶や翅を支へる小さき胸　吉川博子
潮風に重たく飛びぬ夏の蝶　室田妙子
青筋の夏蝶空へ吸はれけり　田邉育子
夏蝶や枯山水に色を足し　多田羅紀子
○母艦公開艦上を夏の蝶　三好ようこ
万緑に分け入るリフト天を差す　武本満子
万緑の呼吸をまとふ青き星　足立朱麻
虚子館の緑やさしく句碑に添ふ　山田佳音
ケーブルカー廃し万緑両断す　藤田敦雄
万緑の中道つくり通学す　小川孝子
夏の蝶何か探してゐるやうな　横山脩子
遠近の万緑染まる旅続く　森岡喜惠子
万緑や細胞すべて蘇る　吉川博子
万緑や太陽の子で森の母　惠島祥一朗
高く舞ふ雲に触れたき夏の蝶　徳岡美祢子
木蔭揺れ風より生れし夏の蝶　横山脩子
花園の光となりし夏の蝶　石角節子
一瞬の風立ちあがる夏の蝶　奥田好子
大空をめざし万緑ふくらめり　田邉育子
吊橋を渡り万緑迫る闇　黒田千賀子
ロープウェー影万緑を縫うて着く　横山脩子
夏の蝶母の遺愛の木から木へ　田邉育子
○目つむれば吾も万緑の一と欠片　奥田好子
夏蝶は花に女は恋に生く　池本準一
万緑や大地の命吹き出せり　中島庸子
閑寂と一村万緑に溺る　徳永由起子
暮れ泥む残照背負ひ夏の蝶　藤田敦雄
万緑に溺れてをりぬ蝦夷の旅　森岡喜惠子
止まる時牛の眼蒼き夏の蝶　山之口倫子
万緑に抱かれ鳥語の降り注ぐ　奥田好子
万緑や窪みに覗く梵字岩　藤田敦雄

万緑と万緑繋ぎかずら橋　多田羅紀子
灯台の小径は険し夏の蝶　惠島祥一朗
追想の少年の追ふ夏の蝶　中島庸子
万緑の大空ミスター巨人逝く　谷本房子
万緑に浸かり細胞改まる　田邉育子
○万緑を仕上げて上がる城の雨　徳岡美祢子
江ノ電の軋み緑の無人駅　石角節子
漣の風の余白に夏の蝶　奥田好子
夏蝶へ六甲の風海の風　山村千惠子
○静寂の一花を被ふ揚羽蝶　石角節子
朝光の水平線へ夏の蝶　奥田好子
窯出しの碗の産声万緑裡　田邉育子
万緑の底に横たふ地球かな　鈴木千恵
夏蝶の舞ひて日の綺羅風の綺羅　武本満子
○一城の自刃の碑より黒揚羽　多田羅紀子
万緑の底に独りのテント張る　池本準一
夏の蝶光の中に動くもの　谷本房子
泥を舐め飛翔の弾む夏の蝶　藤田敦雄
触れさうで触れぬ万緑旅列車　中島庸子
◇　◇
（廣太郎先生出句）
己が影見失ひたる揚羽蝶
万緑の六甲に包まれゆく帰郷
遺されし庭に夏蝶化身めく
万緑の中に大聖堂沈む
俳磚を袈裟懸けにして実梅落つ

第二句会入選句

黒揚羽風と遊んで舞ひ止まず　荒川ともゑ
○万緑に息まで染まる樹海かな　田村惠津子
万緑の底に水音人の声　小柴智子
万緑が万葉の色目覚めさせ　道中義臣
夏の蝶不意に木洩れ日より出でし　南波喜久子
万緑を襲ふ雨脚太かりし　荒川ともゑ
夏蝶のワルツに巡る離宮園　小柴智子
万緑下ささめきやがてささめきに　近藤六健
万緑や力漲る山の神　槌橋眞美
万緑の山の静まるきつね雨　西村みどり
ランドセル放り夏蝶追ふ帽子　酒井湧水
万緑を大吊橋が裏返す　玉手のり子
万緑の山を傾け二人乗り　大西誉子
万緑や浄土の池の弁天堂　柿崎典子
万緑へ馬の機嫌を曳きゆかむ　吉田知子
見上げてはくぐりては空夏の蝶　田附光映
嫌はれて生き延びて今揚羽蝶　高橋純子
万緑へ万葉の径一ト続き　北井真有美
万緑の稜線しるき曲線に　本郷桂子
濃淡を重ね六甲万緑に　田附光映
万緑を握る赤子の拳かな　藤井啓子
万緑の底をトロッコ風を切る　北井真有美
万緑の扉の底の難所かな　田村惠津子
万緑やダム湖の放つ水の色　西村みどり
○山頂は天界の裾万緑裡　玉手のり子
○黒揚羽光と影を操りて　槌橋眞美
夏の蝶舞ひて清しき風を呼ぶ　近藤六健
万緑や心の扉開けて風　杉山千恵子
夏の蝶影置き去りに舞ひ上がる　荒川ともゑ
いつの世も米よ真水よ万緑裡　西村みどり
夏蝶や野を駈け来たる佳き知らせ　藤井啓子
風見鶏目ざす神戸の万緑裡　田中由子
○ぶるぶると羽震はせて揚羽蝶　新田佐代子
万緑や今離れ来し島青く　生澤瑛子
山風にふはりと乗りし揚羽蝶　田村惠津子
万緑をいよよ深める雨とこそ　柄川武子
万緑や吾も一草になる川辺　辻田あづき
万緑にもう一息を登りたる　林　曜子
夏蝶の日差と来ては風と去る　杉山千恵子
万緑や黒一塊の淡路島　藤井啓子
気がつけば黙し目で追ふ夏の蝶　髙木雅惠
日に遊び風に浮かれて夏の蝶　本郷桂子
万緑を映して湖のまさをなる　近藤六健
ビタミンを呑み万緑に立ち向かふ　槌橋眞美
梅雨に入る晴れしかの日を置き去りに　前田容宏
棚田風群なし浮遊夏の蝶　細田清子
ジョギングの先行く夏の蝶白し　酒井湧水
リボン付きワイン持て入る緑かな　吉田知子
万緑と言ふ美しき奈落かな　玉手のり子
万緑の山の一水海光る　奥山登志行
夏蝶や錆びゆくままの廃線路　前田容宏
万緑や両手広げし聖パウロ　岩鼻絹子
○万緑やひと葉ひと葉にある命　酒井湧水

万緑と万緑分ける渓の音　道中義臣
万緑や風の香日の香濃き日なる　本郷桂子
夏の蝶飛び太陽のかけら飛ぶ　生澤瑛子
川音と万緑の隙糸垂らす　高橋純子
○日と影を螺旋に上る夏の蝶　吉田知子
万緑を抜けて白壁天守閣　柿崎典子
万緑や老には老の佳境あり　小柴智子
雨後の庭あつけらかんと夏の蝶　道中義臣
来し方の軽き語りや夏の蝶　大西誉子
○言の葉を揺らし緑の風つよし　林　曜子
夏の蝶雲より白きもの知らず　大西誉子
夏の蝶舞ふや朝より妻外ト出　生澤瑛子
主居ぬ星見台へと夏の蝶　高橋純子
万緑へ前の二人が溺れゆく　田附光映
万緑裡白き館は孤独なり　新田佐代子
突き上ぐる命の鼓動万緑裡　北井真有美
人の径風の道あり夏の蝶　林　曜子
万緑の山一水を流しけり　辻田あづき
夏蝶の天より夫の伝言か　平田　惠
○白き花一輪邸の万緑裡　田中由子
影と影ぶつかり合ひし万緑裡　荒川ともゑ
万緑や反芻の牛岩のごと　槌橋眞美
戦場に天使降臨夏の蝶　近藤六健
万緑を統べ十字架の輝けり　酒井湧水
魚屋道万緑を抜け有馬へと　細田清子
訪へばまた夏蝶とあふ師の墓前　柿崎典子
高原に彼を偲べば夏の蝶　田村惠津子
黒揚羽水辺の石に同化して　樋口レイ子
夏蝶の黒は魔界の使者として　玉手のり子
○羽撃きの音あるごとく夏の蝶　前田容宏
万緑に包まれ大地息をする　髙木雅惠
せせらぎに影の走りし夏の蝶　樋口レイ子
万緑のテラスコップを一つ置く　辻田あづき
幽谷の黙を乱さず夏の蝶　大西誉子
夏蝶の軌跡に恋の魔法かな　吉田知子
日の差して逆ひ夏蝶昼下り　平田　惠
この恋の終る予感や黒あげは　藤井啓子
学生の恋を引き寄せ夏の蝶　西村みどり
万緑へ一筆書きの飛行雲　道中義臣
何千もギリシャの谷の夏の蝶　髙木雅惠
アングルは緑の中に笑ふ君　杉山千恵子
夏蝶や葉末に残す揺れ微か　北井真有美
一本の木が森となり万緑に　近藤六健
六甲の嶺々万緑に連なれり　田中由子
○漆黒の影の主張や揚羽蝶　玉手のり子

◇　◇

（廣太郎先生出句）
万緑の気は鵺塚に触れて消ゆ
万緑や震災三十年の静寂
夜は星の使者と語りて夏の蝶
夏蝶に風のタクトは四拍子
万緑を整へてゆく庭師かな

◎次回第82回六甲会は令和7年9月5日(金)開催です。
兼題　地虫鳴く・爽やか